

長谷川慶太郎著「軍事防衛は大問題」東洋経済新報社 2010年8月5日刊を読む

軍事・防衛は大問題 - 日米安保なき後の防衛をどう考えるか -

1. アメリカは日本を守るが、日本はアメリカ国土の防衛義務を負わないという、異常に片務的な日米同盟が、日本安保条約だ。
2. したがって「安保廃棄」というスローガンと、「憲法第九条を守れ」という要求とは、論理的に完全に矛盾していた。僕らがもっとも答えたくなかったのは、では「安保がなくなったら、正式の軍隊を持つのか」という問題だ。
3. 国民のほとんどが「日米安保と第九条がワンセット」であると思っていたから、時が経つにつれて、彼らの運動は支持を失っていった。
4. そして決定的な瞬間が訪れる。当時の社会党の村山党首が、自民党との連立で首相になったとたんに「日米安保と自衛隊容認」と180度、政策を転換してしまったのだ。
5. 村山党首は、その理由として、ソ連崩壊による冷戦の終わりを挙げたが、これはまったくのこじつけだ。アジアでは冷戦が終わっていないから、まだ日本は日米安保に頼っているのである。完全に冷戦が終結したら、アメリカがいつまでも、これほど片務的な日本防衛の義務を負い続けるだろうか。
6. 彼らが答えたくなかった問題、「日米安保に頼らず、日本が正式に軍隊を持たなくてはならない」日が、間近に迫っているかもしれない。
7. アジアで冷戦体制が終了した時点で、初めて日本が本格的に新たな困難に直面する。冷戦が終われば、アメリカが一方的に日本を守る大義名分は消滅してしまう。
8. 「安保タダ乗り」を前提とした憲法第九条は、その裏付けを喪失することになる。
9. 多くの日本人はそのとき、実は冷戦と日米安保の永久継続を願っていたことに気づかされて狼狽するかもしれない。
10. 冷戦が終わりさえすれば、すべての国際紛争がなくなる、と信じ込めるようなお人好しは少ないだろう。

11. いつの時代であっても、世界のどの地域であっても、国境を守ることは、国家とその住民にとっての、決定的な死活問題である。
12. 国境を守るための抑止力がなくなれば、国境は容易に侵犯され、その結果、国民の生活と安全が徹底的に毀損されていく。
13. このことは国際政治の冷徹な真実であって、歴史的にも実証されている。
14. 日本人も真摯に、この問題に向き合う時期がきたと言えよう。

P211 ~ 213

[コメント]

中国や北朝鮮などの社会主義国が国家体制を自主主義・民主主義の国に転換した時に、つまり、冷戦が終結した時に、日米安全保障条約はその存在意義を終了。米国の軍隊は日本から撤退する。その後の日本の安全保障をどうするか。長谷川先生の問題提起は、10年後の日本のかたちを考えるとときに避けることができないと私は考える。

- 2010年7月29日 林 明夫記 -